

Ⅱ-2 [コラム] 古墳で見る川上谷、 そして伯耆谷

奥 勇介

1. はじめに

1983年(昭和58)、門脇禎二氏(京都府立大学教授(当時))は「丹後王国論」を提唱し、竹野川流域を中心とする王国の領域は川上谷川流域や野田川流域にまで及ぶものと考えた(門脇1983・1986)。門脇氏は川上谷川水系に、『古事記』にみえる河上麻須郎女をめぐる少なくとも2代の男系タテ系図を復元している。丹後王国の最盛期は、4世紀末(もしくは4世紀中頃)～5世紀とされ、竹野川河口域には神明山古墳、野田川流域には蛭子山古墳が築かれ、福田川河口域の網野銚子山古墳とともに丹後三大古墳と称される巨大古墳が築かれる。

一方、川上谷川流域では大型前方後円墳は見られない。川上谷で最古級の前方後円墳の位置づけにある島茶臼山古墳(久美浜町島)は、前方部未発達で柄鏡形に見える形状が報告されており(同志社大学考古学研究会1973)、築造年代は古墳時代前期(4世紀後半頃)に求められている(奥村1983a)。岩ヶ鼻古墳(久美浜町甲山)や芦高神社古墳(久美浜町芦原)がそれに続く。その後は、須田平野古墳や湯舟坂2号墳へと続き、首長墳は川上谷の支流域である伯耆谷に移るものと理解される(奥村2021)。

本報告では、川上谷、そして伯耆谷を可視領域分析によって大局的に見たときの、首長墳の移動に伴う選地動向について考え、湯舟坂2号墳の被葬者“像”を知る一つの鍵としたい。

2. 川上谷から伯耆谷へ

川上谷川中流域右岸の丘陵上に島茶臼山古墳(標高約50m、墳丘長約42m。古墳時代前期)がある。島茶臼山古墳の特徴は、その可視性にある。地理情報システムソフト(QGIS)において、国土地理院公開配布の基盤地図情報(数値標高モデル)を解析し、島茶臼山古墳から見える領域(可視領域:紫色(グレー))を示したものが図1である(なお、以降提示する可視領域図はすべて同じ方法で生成したものである)。ただし、これは古墳築造時と同じく、古墳一帯が開けている場合の可視領域である。

島茶臼山古墳は、川上谷川の上流域から下流域までを見渡せる好立地にあると言える。川上谷一帯を治めた首長の墓としての立地を志向し、当該丘陵を選んだ可能性が考えられる。

岩ヶ鼻古墳(標高約20m、墳丘長51m。古墳時代前期)も、北側から川上谷全体を見渡せる好立地にある。久美浜湾に近く、海の道を意識した立地と言える。

その後、芦高神社古墳(標高約10m、半壊。古墳時代中期末～後期初頭)では様子が変わる。川上谷川中流域の少し東へそれた平地にあるため、可視領域が狭まり中流域一帯のみを見渡す(図2)。しかし、伯耆谷も視認できる位置にあり、首長墳の選地動向を見る上で興味深い。この段階で、既に伯耆谷の重要性が高まり始めていたと考えられる。

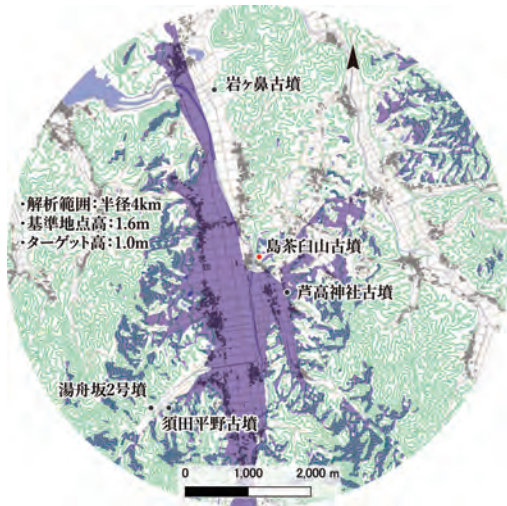


図1 可視領域図①（島茶白山古墳）

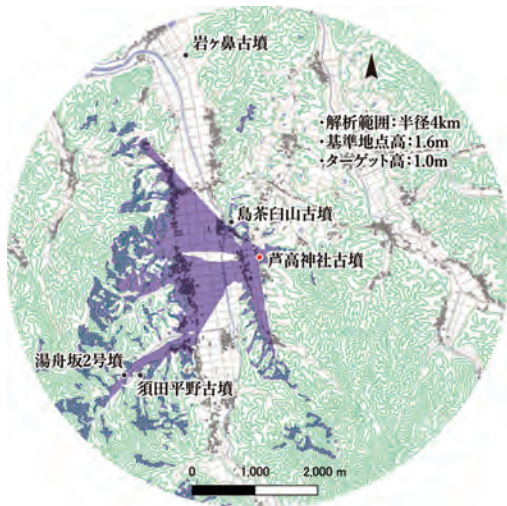


図2 可視領域図②（芦高神社古墳）

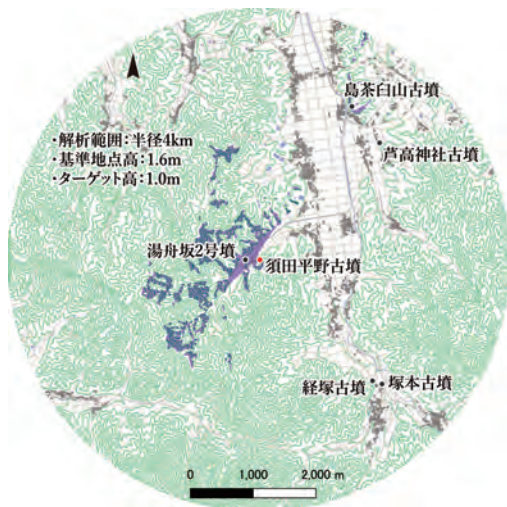


図3 可視領域図③（須田平野古墳）

3. 伯耆谷と「大坂峠」

伯耆谷は、川上谷地域における古墳密集地として知られる。伯耆谷の奥部には、古墳時代後期に須田平野古墳や湯舟坂2号墳が築造されるが、谷の東側一帯には、丘陵上に多数の古墳が見られる。ユリガ鼻古墳群では、墳頂部に陥没痕の見られるものがいくつか視認でき、須田平野古墳以前の築造と思われる古墳群が展開する。伯耆谷においては、基本的に谷の東側から西側へ古墳が展開していったと見て大過ないだろう。

伯耆谷に首長墳の築造されるようになった理由として、但馬とつながる道「大坂峠」越えがあり、この街道を通じた陸の道での交流が盛んになった可能性はある。伯耆谷が、陸路の中継地点として重要な位置を占め、大和政権との政治的関係を背景として重要視されたという考えである（奥村 1983b）。山陰道から分岐して但馬を抜け、湯舟坂2号墳のある伯耆谷から丹後に入り、川上谷川を下って日本海へ出るルートが、出雲へのバイパスとしての役割をもったとされる（清水 1983）。ただし、『熊野郡誌』には「大坂峠の峻阪頗る嶮悪なれば、（中略）交通上困難なるは一なり。」とある（京都府熊野郡役所編 1923）。古墳時代にこの峠道がどれほど利用されていたか定かではない。この時代、既に丹後一円では大型前方後円墳が見られず、門脇氏は6世紀中葉頃に大和政権の圧力が強まってその支配下に入っていたと考えている（門脇 1983・1986）。中央集権体制が強まる中で、「大坂峠」の重要性が高まっていったことが考えられる。

可視領域的には、須田平野古墳（標高約 65m）が伯耆谷から「大坂峠」方向を志向するのにに対し、湯舟坂2号墳（標高約 55m）は遠目に芦高神社古墳周辺さえも可視領域に含める位置にあり、先の首長墳や川上谷川から久美浜湾・日本海へ抜ける海の道への志向も重要視した立地と言える（図 3・4）。

4. 川上谷川上流域

古墳時代後期に入ると、川上谷の最奥部にも首長墳が築かれる。経塚古墳と塚本古墳である。この両古墳の可視領域には顕著な志向性は見受けられない(図5)。市野々・布袋野周辺をおさえた有力者の墓という点では大過ないだろうが、中流域の首長墳の一群との関係性については検討が必要である。

5. おわりに

島茶白山古墳や岩ヶ鼻古墳など古墳時代前期の首長墳は、いわゆる丹後王国の一首長であり、久美浜湾や川上谷川を用いた海の道で栄えた有力者と言える。中期になると、中央政権の影響が少しずつ及びはじめたのか、「大坂峠」に続く伯耆谷を意識するようになり、後期には須田平野古墳、そして陸の道・海の道の両方を志向する湯舟坂2号墳が伯耆谷に築かれる。島茶白山古墳・芦高神社古墳・須田平野古墳・湯舟坂2号墳は可視性の観点で一定の領域的展開を示しており、川上谷川中流域における一つの関係性を持った一群としてグルーピングできそうである。

川上谷には他にも多くの古墳があり、それらとの関係性も含めてなお検討が必要なのは多い。

可視領域の観点から見た場合、湯舟坂2号墳は、川上谷川中流域において島茶白山古墳から続く首長の墓として、かつ海の道と陸の道の両方を志向した、まさに川上谷、そして伯耆谷の首長としての被葬者“像”を見て取れるのではないだろうか。

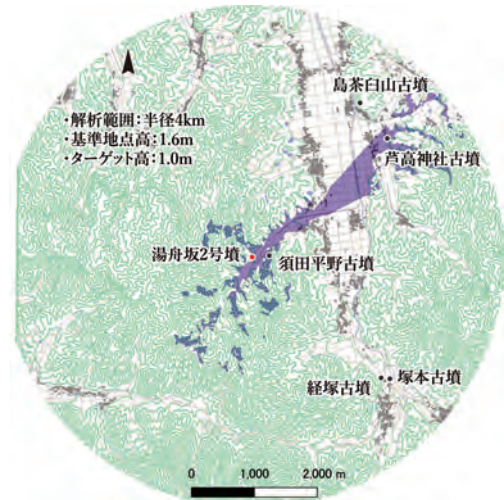


図4 可視領域図④(湯舟坂2号墳)

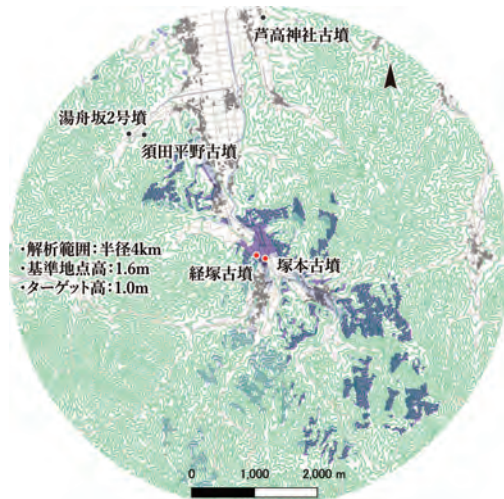


図5 可視領域図⑤(経塚古墳・塚本古墳)

参考文献

- 奥村清一郎 1983a 「1. 位置と環境 (3) 歴史的環境」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 奥村清一郎 1983b 「8. まとめ (6) 総括」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 奥村清一郎 2021 「湯舟坂2号墳の発掘調査をふりかえる」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室
- 門脇禎二 1983 「丹後王国論序説」『丹後半島学術調査報告』京都府立大学
- 門脇禎二 1986 『日本海域の古代史』東京大学出版会
- 京都府熊野郡役所(編) 1923 『京都府熊野郡誌』
- 清水みき 1983 「付載3. 湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 同志社大学考古学研究会 1973 『同志社考古』第10号

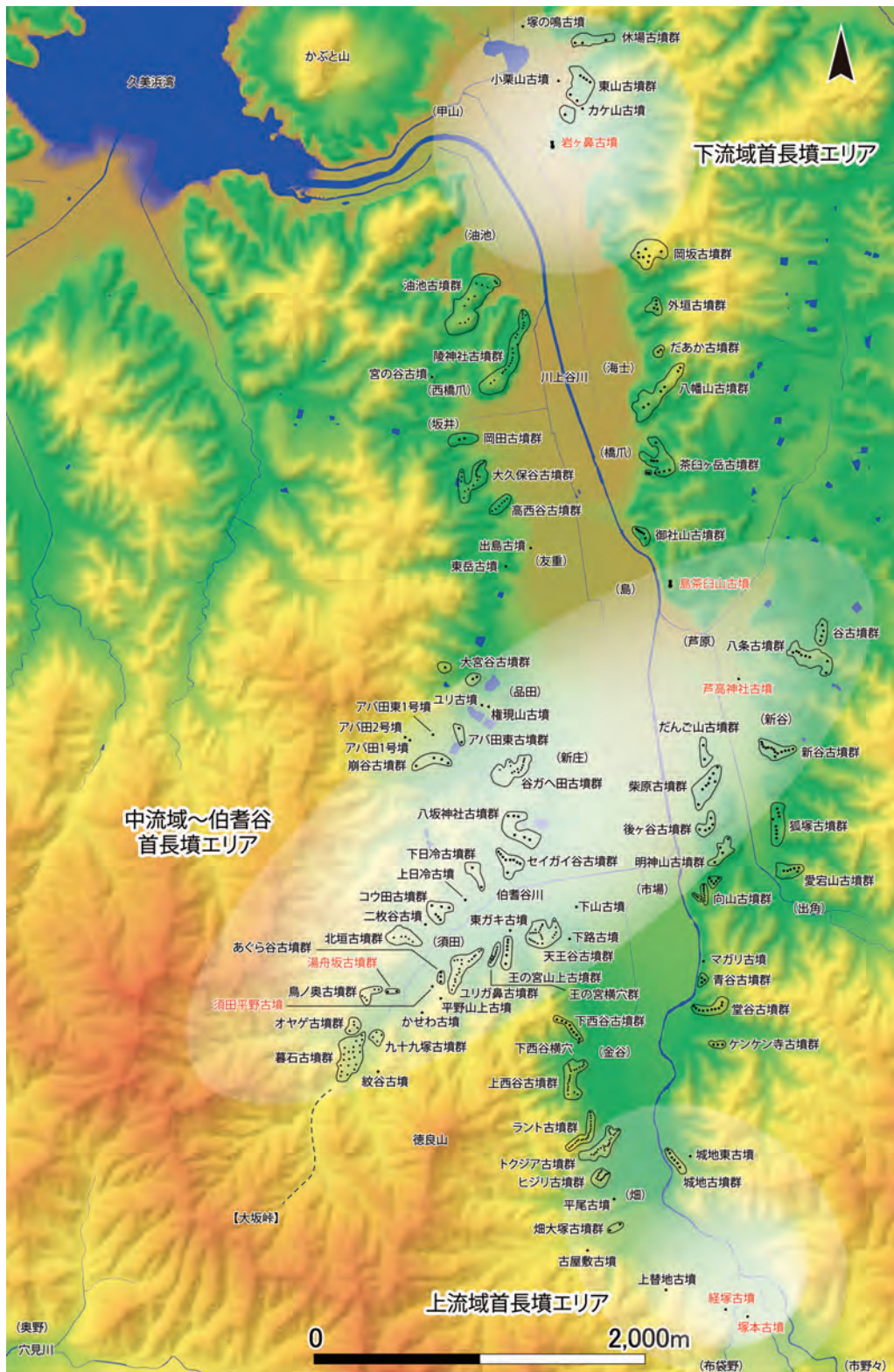


図6 川上谷の古墳分布図 (S=1/40000)

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2